



TITLE:

実験所史番外編

AUTHOR(S):

小林, 直正

---

CITATION:

小林, 直正. 実験所史番外編. 瀬戸臨海実験所創立90周年 (1922-2012年) 記念文集 2013: 45-56

ISSUE DATE:

2013-12-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/186994>

RIGHT:

# 実験所史番外編

小林 直正

(同志社大学名誉教授)

この文は小林がここに初めて来てから 60 年を経た今、これまでにあったこと、先輩から伝えられてきたことなど、瀬戸臨海実験所五十年史に記されていないことで、知っておいてもいい話題、一寸面白<sup>ちふふ</sup>い話などをまとめたものである。記載の順序は五十年史に沿い、それを引き継いだ。

## 第一期 1922～1935 年

臨海実験所がここに設立されたときには、この土地は大部分白浜の瀬戸部から引き継いだもので、番所山もどうぞということであったが、管理が充分出来ないというので断ったそうである。決められた池田岩治先生は御無欲であったのであろう。今から考えると大変惜しいことであった。ここへは和歌山港から大阪商船の客船に乗り 4 時間余で田辺港に着き、それから実験所の船に乗って来なければならなかった。しかし、近くには 1300 年前の日本書紀に記されている古来からの温泉（牟婁の湯）もあり将来の交通の便も期待されたのであろう。なお、紀勢西線の延長により白浜駅は 1933 年に完成した。番所山には番所山臨海パークがあり、中の熱帯自然植物園（1933 年開設）は小ぢんまりしていたが熱帯系植物が多く、温室や喫茶室もあった。昔はここに紀州藩の番所があり、外国船の監視をしたところであった。

昭和 4 年（1929 年）6 月に昭和天皇が臨海研究所に行幸されたがこのときは戦艦長門で田辺湾に來られ白浜桟橋に上陸された。町から研究所までの山越えの道は、海沿いの舗装道路に変わり、それはこのとき急造されたものであった。この新しい道は白浜桟橋から町までの既存の道に続くものであっ

て、天皇は桟橋からの 3 km ほどの道を歩かれたのであった。最近ではもちろん車利用ということになり、今では考えられないことである。しかし天皇は自然愛好家の生物学者でもあり、御足は鍛えておられたのであろう。天皇が休まれたところは木造平屋建の特別研究室である。ここのトイレは特別で広く出来ている。外人向けなのか？天皇も使われたのであろう。本来は長期滞在の研究者家族用の間取りの板張床で、広い研究室もあった。駒井卓先生をはじめ、先生方の御進講の後、周辺諸小島付近の生物採集に御出かけになられ、それに関わった小舟（お召船）は現在も瀬戸の三所神社に保存されている。

瀬戸臨海実験所については次のような私の記憶がある。小学校 6 年（1941 年）のとき、大阪の高島屋で和歌山県物産展が行われていた。和歌山というと何となく興味があって出かけた。そこに白浜に關した明光バス提供の絵はがき数種があった。その一つは瀬戸臨海実験所水族館指導のもので、熊野灘産珍魚絵葉書（原色版）で海の動物（イトウタヒ、トラウツボ、ツノダシ、フウライテフテフウヲ）を、牧野四子吉画伯（京大動物学教室で動物の絵を依頼されて描いておられた）が描いたものであったこと、最近実験所の日誌で判明した。今でもそれを保存しているが（実験所へ寄贈）、まさか大学以後に 60 年間に涉<sup>わた</sup>って瀬戸臨海実験所に通い続けるなど全く考えも付かなかった。本当に不思議な縁といえるであろう。

学生への臨海実習は 1～2 週間が普通であったそう<sup>う</sup>で、ここは当時交通が不便なので陸の孤島同然、いわゆる俗世を断ったところで、実習にはほとんど休日もなく、一日中採集、観察を行っていて、教育

効果絶大であったようであった。訪れる人はほとんどなく、稀に来られると大歓迎で、特に甘いものを持って来られると皆大喜びであり、また駒井卓先生は楽しみの一つである食事の味の改善を指摘されたこともあったそうである。白浜の街へ出るには山越えか実験所の船で行かねばならなかったが、特に郵便局へはよく行ったようである。手紙の出し受け、送金の受け取りなどであったが、局長の3人の娘さんが目当てともいわれていたとのこと、若い女性が近くにほとんどいなかったことが悩みであったようであり、今では全く考えられないことである。魚釣りはよく行われたが皆あまり上手くないし、ランプ遊びなどもそれほど何時もは出来ないなどこの生活に飽きがきて困ったそうである。なお、実習の内容は生物採集、プランクトン観察、解剖が実に多かったそうであり、他にウニの発生の観察なども行われた。臨海実験所への往復は鉄道が来る前は大阪から田辺へは客船、それから実験所の船ということで船酔いを起こす人も多く居られたといわれている。初期の実験所へ来られた学生の中には色々な人がおられたが、動物学科卒業後、法学部へ行かれ、後に大阪の警視總監になった鈴木栄二氏もおられた。山内年彦氏はナマコの研究をして居られ、実験所の講師もされたが、麦藁帽、シャツ一枚、ステテコ姿で紀伊半島を歩いて一周し、ナマコを調べたと言われていた。全く構わない方で、戦後京都市の教育委員をされたが、ラフな格好でお臍を出して河原町を歩いて居られたといわれている。私達の先生クラスの学生時代は坊ちゃん扱いされていたり、意外な所業があったりしていたそうである。また、教員には山本宣治氏もおられ、東大の動物学科を終え、京大の臨湖実験所や瀬戸臨海実験所の講師になられたが研究はほとんど行わず直ぐにやめ、労農党の代議士になり社会運動を行い、後、暗殺された。1934年9月22日室戸台風の襲来を受け、ガラス窓、建

物の被害が甚大であり、海の生物も打ち上げられた死亡個体が多く見られ、御幸道路、海岸道路も跡形無しになったといわれている。水族館も被害を受け、お客も来られないので一時休館になった。

## 第二期 1936～1945 年

戦争に至るまでの記録はあまり知られていない。実習は1945年4月まで行われていたし、研究活動もその後も行われていた。1941年12月8日、太平洋戦争開始。42年4月、宮地伝三郎先生満6年の白浜生活から京大へ帰られた。42年8月、森主一先生はウミサボテン（コジキノマラまたはコジキノサオといわれていたが、天皇に駒井先生が御教えるのに困って名前を変えられたといわれている）の研究を続けておられたが、研究室での夜間の伸長には成功しておられなかった。これについて、ある人曰く、それが夜中に伸びないのはホルモン不足？ではないのであろうかと。

戦争末期3～4カ月間、実験所は海軍防備隊（杉本分遣隊）により接収された。寄宿舎は兵舎になったらしい。（なお、特別研究室の倉庫の中には元陸軍の兵器入れの箱や電信機らしいものもあり、これは戦後加太の深山重砲隊所属の観測器機等を、県から払い下げられたもので、私が実験所に来た当初には寄宿舎の茶碗、灰皿の一部には元陸軍のものである星印マークが付いていた）。水族館は武器庫になっていたといわれている。さらに実験所構内にかつては独立した博物館があったが、ここも兵士の宿舍になったということであった。また海軍の高角砲陣地が番所山上にあったらしい。さらに、実験所周辺には今も海辺の岩壁に多くの洞窟様の大穴が多い。これらは主に海蝕洞であろうが戦争末期にはその内の大きなものは、拡大して洞窟陣地として武器を運び込んで海岸防衛に備えたものであろう。戦争末期の1945年に入ってB-29超重爆撃機による激し

い空襲が関西地方にも度々行われた。防空情報なるものがラジオから放送されていて、尾鷲南方…、潮岬上空通過、紀伊水道北上中など丁度空襲の通路になっていたのであった。平草原の電波探知機（レーダー）基地、番所山の高角砲の陣地などがあって当然であったのである。戦争末期には水族館も艦載機に銃撃されたそうである。戦後 11 月下旬、陣地などは全て破壊され、軍は引き上げ実験所は返却されたが、被害は甚大で復旧は困難を極めたという。

### 私が実験所に来る以前の話題

実験所と街を結ぶ海沿いの道がまだ出来ていないとき、町へ行くには山越えをしなければならないか、または船で行かなければといわれていた。山越の道には夏は必ずマムシがいた（今でもいるという）ということである。当時学生であった椎野<sup>すゐの</sup>季雄氏は街の「角屋」に毎夜通っていたといわれていたそうである。今は名菓などの販売だけで移転前の白浜警察署のそばに移転してしまったが、当時は街の唯一の喫茶店と伝えられていて、そこの娘さんがお目当てだったそうである。同氏はその後、実験所の助手になられたが、奥さんを同伴されて学生達から何かと僻<sup>ひが</sup>まれたそうである。もう亡くなられたが、学生時代はやんちゃな人であったようで、愉快な、優秀な、いい方であった。この同氏によるとかつて英国の有名な植物細胞学者 Darlington 博士が夏に実験所に来られたことがあったが、その際午後の昼寝のとき素裸で寝ておられたので、目の遣り場に困ったと語っておられた。習慣の違いもあったのであろう。実習のときなどは駒井卓先生は奥様と一緒に来られ、旅館に泊まって居られたこともあったともいわれていたが、実験所の宿舎の風呂には何時も奥様が第一番に入られたということであった。男性より先に風呂に入るとは怪<sup>あやま</sup>しからんとこれも椎野氏が、あるとき先に飛び込んだのはいいが、水風呂であった

という伝説も伝わっている。お会いする度これらの話を思い出して可笑しくて仕様がなかった。

### 第三期 1946～1955 年

1948 年 2 月、瀬戸臨海実験所自活農園が開かれ、7 月学生実習も再開されたが食糧難は大変であり、亀の卵も料理された。

1948 年春の臨海実習で、田辺湾内の海洋観測を行うため Janthina が学生の要望により南浜から船出した。突風大波で、番所崎沖で岸近くに流され、船のエンジンまたも故障し、修理に手間取っているうちに船は岩礁地帯に接近した。そのままでは岩にぶつかって船が破壊されることになるので、曳航されていた Obelia に乗り組んだ者達 11 名（波部忠重、山路勇先生と学生 9 人）は海へ飛び込んで岸へ泳ぎ着かねばならなくなった。泳げない者もいて困ったらしいがとにかく皆助かったのであった。井狩女史は直ぐに舟板を外し、掴まる為に皆海に投げ、西五辻（宇尾）女史は見事な抜き手を切って泳がれたそうである。第一番に実験所に報告された波部先生は報告が済んだらばったりと倒れられたとのこと。警察、役場、漁業会に援助を乞うなどと大騒ぎであった。結局 Janthina のエンジンの修理が出来て船は助かったが、大波で Obelia に積んだ観測機材、食料、私物などは全て失われたのであった。実習は中止、夕方宿舎前で焚火をして金比羅さんに感謝し命拾いの酒宴を開いたのであった。夕食には雑賀船長、浦さんも加わって慰労会になり、和やかに行われた。これ以後、船は北浜からのみ出るようになり、海が荒れると出さなくなって、特に、沖の四双島へは波が静かなときしか行けなくなった。

1951 年春の実習で、内海富士夫先生曰く、“ここは道場である。以前ダンスホールへ夜中に行って小さい町中の大評判になったことがある。注意するよう”と。この年から新制度生が来るようになった。

また、この頃から夕食後にYコロジ－討論会（Yはワイセツの意で、ecology をycology と捩<sup>もじ</sup>った）が始まった……女性には一寸……。一方、京都に帰る前の晩にはズボンを寝押しすること（スジを付ける、アイロンは一般化していなかった）が行われていた。人里離れた所から京都へ帰るのも工夫がいるのだ。なお、難しい食料事情も反映してか、臨海実習の皇岛では貝食いが盛んに行われていた。1953 年春から夏以後、2、3 年は小野喜三郎先生の番外の“第4 講座”（当時、動物学教室は3 講座編成）が色々な内容で開講されていた。

1953 年7 月10 日からの臨海実習は人数が少なかったもので、阪大の実習と合併して行なわれた。阪大のものは生理関係が得意そうで、京大はそれが生態であり、やはり大学の特徴が出てくるものだと思うされた。2 週間の実習を終え京都に帰る前の18 日、物凄い豪雨があって夕方には海が黄色くなってしまう。降雨が川を通じて土砂を流し、また陸上の土砂が直接海へ流れたもの等が加わったものであった。海水が薄まり、それに敏感な水族館のイセエビ、セミエビなどが死んでしまった。その日の夕食にはこれらが料理されて出たのであった。思いのほか美味しかった（そのずっと後まで時々こんなことがまた起きないかと食堂で話題になり期待したが2 度と起らなかった）。ところがその後の街からなどの情報で、紀勢線がこの南海大水害で方々で分断されて完全に不通になっていたことが判った。その間に田辺港から海上保安庁の巡視船が和歌山港へ特定の旅客を輸送することが判った。

特定の旅客とは当時夏休みで女子生徒などが臨海学舎に来ていたのであって、この人たちの介助をするなどと称して割り込むことが出来たのであった。20 日6 時発、巡視船は270 トン余のハマチドリ（戦争中の水雷艇「くす」で、いわゆるトンボ釣り、すなわち墜落した軍用機の搭乗員を救助する仕

事もしていた）であった。乗船後黄色い海には流れ出たゴミなどが多く、紀伊水道への海はよく荒れ、乗員からは海上に流れているかも知れない遺体に注意して知らせて下さいと言われたが、それどころでなく船酔い寸前であった。もちろん女子生徒の介助どころではなかった。森主一先生は早々に酔って船底室で寝ておられた。やっとのことで和歌山港へ着いて森先生をトップに陸に上がったが、しばらくは地面が揺れている様に感じた。次の行動まで待っている間に、ふと見ると森先生が弁当を食べておられるのにはびっくり吃驚した。船上では直ぐに酔われたのに、陸上ではすぐ回復してお腹が空かれたのであろう。その後和歌山駅から無事京都に帰った。紀勢線はその後も被害甚大で、特に有田川周辺で長く不通であった。

1953 年頃は白浜の街の観光会館以外には鉄筋の建物は無かったといわれていた。湯崎の丘の上のレジャー施設ハイブレイランド（今はホテルシーモア）のあったところはかつては製塩工場で、流下式の製塩を行っていた。この製塩法は、上方から海水を流すと、途中に置かれた多くの竹の枝の間を通り、強い日光により水分が蒸発してゆき濃厚な海水となり、これを釜で加熱して塩を採る方法である。その丘の下、天智、斉明天皇以来の古さを誇るといわれる崎の湯は、最近まで料金タダの露天風呂で海のそばにあり、海からも自由に出入り出来る良いお湯であった。干潮時、採集のためこの前を歩くと女湯も見え、思わず目をそらさねばならなかった。また、臨海裏の洞門の向うの磯でヌード撮影が行なわれていたこともあった。磯もゴミが無く、ヌードも綺麗で、人気も無かったので撮影が行えたのであろう。その頃は非常にのどかなもので、観光客も少なく、実験所関係者は学生も含めて“臨海”と言えほどのホテルでもタダで入湯させてくれた良き時代であった。しかし、他大学の臨海実習などが増えるに従ってこの特権の乱用等（旅館の下駄の履き帰りなど）

が問題になり入湯が難しくなって来た。当時海には生物が非常に豊富であって、実験所の周辺はもちろん、南の崎の湯の辺り、東の江津良海岸なども近いのでよく採集に行ったものであった。今では少なくなった生物資源保護のため“磯観察”といって少数の標本以外は採集しないが、かつては“磯採集”といってバケツ一杯動植物の試料を採ったものであった。

この頃には、白浜と大阪を結ぶ水上飛行機、いわゆる下駄履き機による航空路が設けられていたが永くは続かなかった。スチュワーデスはいなかったが、地上（水上）の係員は下駄履きであったとの伝説があり、その所在は網不知であった。当時ここは真珠貝の養殖が行われていて、やがて牡蠣、そして今はハマチの養殖が行われている。これらに因って、やがて赤潮が多発し、過密な飼育や各種の有機物汚染が原因と考えられ、規制や汚染減少の努力がなされて現在は赤潮も減ってきている。しかし、養殖筏の沖出しも進み、現在は島島の北周辺まで来ていて、その影響も問題であろう（後述）。

実験所構内はマツ枯れの起る前は比較的若い黒松の疎林で、早春、ショウロ（松露、白い径1センチ前後のキノコでお澄ましに入れて美味しく食べられる）がとれた。その頃は松傘や枯れ松葉をダルマストーブのたき付けに使うために、当時の用務員の辻のおばさんが何時もかき集めていたので、土がこのキノコの適当な環境になっていたからであろう。この場所にはかつてベンチがおかれ、そばの実習室から来て休むのに良い所であった。古い実習室棟は小さな標本室と準備室が付いた広い2部屋で、入り口に近いものは大学院、外来研究者用、もう一つが実習学生用であったといわれている。後には奥の部屋は海洋、分析の部屋になった。それぞれ真ん中に大きな流し台があり、海水、淡水のカランが数個あって皆が共通に使えるようになっていた（この流し台の小型版は各研究室に造られていた）。ここ

では小動物の小規模な飼育も出来た。窓際にはテーブルが巡らされていて解剖や顕微鏡観察が出来るようになっていた。院生が少なかったときは数人用に衝突してで仕切られていたとのことであった。昔からの照明用電気スタンドのコードが古くなって、使用中海水をこぼすと電気がビリッと来ることもあった。床はコンクリート張りであった。

昔の寄宿舍は木造のやや大きな平屋で、現在の図書室の東側、広場の北側に小さな茂みがある辺りにそれがあった。宿舍の東側には用務員の夫婦の住まい、北側には和風の風呂場があった（初めの頃は井戸水を使っていたので水不足で大変だった。1955年に水道が来て問題は解決したが、節水に注意が払われている）。そして手洗い場、裏が炊事場、中央に食堂、西側の大部分は畳部屋であって、その半部分が2枚の壁で2つに仕切られていた。ここは応接兼娛樂室と物置、及び一応、先生方や女性用の部屋であって夫々襖で2分されていた。その西側は大部屋で襖で4分することが出来たが大抵は広いまま使っていた。この場所は実習学生や外来研究者の寝泊まり、休息をする部屋であった（約30人収容）。ここは大変開放的で、休憩時などは先生方も一緒にいて、喋ったり議論したもので、京都の大学にいたときに比べると、それこそアットホームであった。夏の夜は大抵10時過ぎにはヤブ蚊に備えて蚊帳を吊って寝ていた。しかし、先生の中には研究熱心で、夜中の12時頃目覚時計を鳴らし、起きて動物（ウミサボテン）の観察に出かける森先生もいた。一寸迷惑でもあったが、研究であるので皆それを認めていた。また、夜、亀の産卵を見つけて知らせに来ることもあり、直ぐに見に行く人も多かった。実験所創設初期の頃はこの卵を食べたこともあり、シロミが固まらないそうであった。なお、宿舍の掛け布団の布のデザインは唐草模様のものであったが、実は棘皮動物のテズルモズルであって大変面白いが、一

体誰がデザインしたのか全く不明で、廃棄されてしまい、現在のところどうも永遠の謎のようである。寄宿舍の部屋の外側には雨戸があってこれを閉めると大変暗くなった。台風が来たときには昼でも閉めねばならなかった。しかし、風通しがよく夏は涼しかったが冬は大変寒かった。職員宿舍はかつてはこの寄宿舍の東側に続いて二軒あったが、後に分離して、私が来たときは木造平屋建てが別々に離れて二軒あった。現在は使われていないが、中は老朽とシロアリの被害がひどく、一号宿舍の方は、10年くらい前急に原因不明で自然に壊れてしまった。また二号宿舍も、その数年後には取り壊されてしまった。

今から数十年前の古い木造の宿舍の食事は賄い<sup>まわい</sup>の辻さんが作っていた。大体が和食で、夕食はほとんどサシミで、魚は辻さんが昼間、宿舍前の浜（田辺湾側）でほとんど毎日行われていた地引き網を手伝って手に入れたものを使ったものが多かった。地引き網には色々な海の生物が入っていて大変興味深かった。しかし二十余年で魚が捕れなくなり行われなくなった。京都から来て1,2日は刺身は大歓迎であったが、これが2,3日以上続くと評判が悪かった。たまにカレーライスだと大いに喜ばれた。メニューを変えるのは大変だったろう。食事が出来ると辻豊松さんは何時も先ず“お粗末ですが”と言って、次いで“お食事（の用意）が出来ましたと言っていたので、口の悪いM氏から“お粗松さん（遅待）”という渾名<sup>あだな</sup>がつけられた。ほとんどの実習でイカの解剖が行われ、後はサシミになった。1週間以上実験所にいると悪いがこの食事に飽き飽きした。1954年7月、かねてから懸案だった食費の値下げ交渉が行われた。学生より発案し、教官側代表の意見も聴取して統一戦線を作った。市川衛先生は“そりゃあ君、文句無いだろう。大体今晚出たのでも僕なんか残すよ”と。これに対して辻さんは、”のう学生さん、値段をなんぼにせえと言うて来るのは京大だけ

ですぜえ、安うにさしといて白浜の町で何か買うて食うたりするのあ弱い者泣かせですぜえ”と頑張るも及ばず、かくして値下げ交渉は成功を収めたわけであった。戦後の貧困時代を思わす一幕であった（後、70年代には生活が豊かになり値上げが行われたのであった）。このようなことから1956年、学生の中の二人（I氏とK氏）が自炊と称して街でサシミを買って来、また貝を採り、ご飯も炊いて夕食を採ったが不衛生であったのか翌々朝から下痢し、翌日I氏は這々<sup>はうはう</sup>の体で京都へ帰ってしまった。K氏は下痢し、熱も出して数日休んだ。辻さんにはやにや喜んだが、動物学教室の必修の臨海実習を途中で無断<sup>むだん</sup>で帰ってしまったので、教員の中では相当の物議をかもしたようであった。以後実験所で賄いが行われていた間は二度と自炊はされなかったようである。この頃から他大学の臨海実習も増えてきた。京大との大きな違いは、大学にも依るが実習時の真面目さ、行動の違いで、中には半分遊びの者もあった。もう一つの大きな違いは、殊に私大の場合、干してある水着は京大のものに比べて派手なものが多く、その対比が面白かった。私が同志社へ行って特に驚いたのは服装の派手さの違いで、殊に女性に著しかった。現在ではその違いはほとんどないと思われる。

#### 第四期 1956～1964年

実験所の入り口付近も大きく変わった。50年ほど前、初めは6,7軒の御土産物屋、食堂などであった。露店の大仲（後、観光記念写真の引渡所、今は廃屋そして解体、更地化した）、別荘（今はマルキ民宿）、乙姫プール（海女の水中ショウ、今はマリンハウスマルキの駐車場）、雑賀屋、レストラン珊瑚礁、ショウボート、食堂（今は海底観光船の事務所）である。臨海実験所の正門は古い門柱を残して後退し新しい門が出来た。土地の一部を海沿いの観光用の道路として譲ったからである。狭い旧道は草蒸してほとん

ど判らなくなった。さらに海の一部を埋め立てて町営駐車場が出来、潜水艦型グラスボートも営業を始め、今では流行っているダイビングスクールの分室も奥の方に出来た。グラスボートは、かつての程ではないが海の中の様子を簡単に知るには適しているので乗客も多いのであろう。一寸料金が高いが、

増加する研究者の宿泊用に木造平屋建の楽学荘（1958 年建造）が建てられ、洋室と和室があり、これは短期滞在型であったが、設備は整っていた。ここには何回か泊まったことがあるが、大きな畳部屋より小部屋、小さな洋間の方が住み易かった。ときにはゲジゲジやムカデが畳の間などから出て来ることがあった。しかし楽学荘は大改造して現在、長期滞在の大学院生の部屋になっているが、県道に沿っているので、昼間は一寸騒音が多いようである。

1958 年頃、ロープウェイがかつては観光会館近くと平草原展望台を結んで存在していた。景色が大変良かったそうで一度乗るつもりであったが乗りそびれている中に廃止されてしまった。一時は臨海地区へ延ばす計画もあったらしいが、若し出来たら円月島が近く眺められて良かったとも思われるが、一方台風のときは大変だろうと考えている間に計画中止になり、やがてすべてが無くなってしまった。また、水族館の動物を主とした生態写真集（絵葉書）が 3 種類出された（1958 年 4 月～）。中々良いものであって、今後とも出版されることが期待される。

紀勢線の東、西両線が繋がれたのは 1959 年であった。それより以前は間がバス連絡で高いところの山道を通して繋いでいて、所々に落ちた車の残骸が見られたという一寸恐ろしいところで、ぜひ最終バスまでに通ってみたいと思っていたがその機会を失してしまった。実験所へ来る国鉄のディーゼル化は 48 年前のことで、それまでは蒸気機関車使用であったのでトンネルに入ると、開いていた窓を直ぐ閉めねばならなかった。それだけでなく京都から乗

り継いで 6 時間余りかけて実験所に着いてみると顔が煤けていた。ディーゼル化されこれでやれやれという事であり、35 年前には電化され、現在ではさらにこれが京都から直通 3 往復で 3 時間前後に短縮した。しかしカーブが多い線で、乗り物酔いの人が多いらしい。

1960 年の頃には、夏の夜、旧研究室にいと電灯の光に誘われて虫達がやってきた。窓硝子<sup>がらす</sup>にぶつかる音により大小が判った。カブトムシ、クワガタ、カナブン、コガネムシ等々、大きいときはすぐ見に行った。なかなか楽しいものであった。今ではこれらの虫はほとんど得られないものである。1961 年 7 月、臨海実習の学生により日刊“白浜実話”なるものが発行された（I 氏著）。ウソかマコトかよくわからないが面白いものである。なおこのクラスの臨海実習ノート（IV）にはそれと、この実習期間の食事の献立まで記してあった。1963 年 3 月には寒波で水温 12℃以下になって南方系のハギ類などが多数仮死または凍死し、ウニでもナガウニ、コシダカウニ、タワシウニ、シラヒゲウニなどが多数死んだ（1980 年にも）。

水族館は 1964 年に国立大学唯一の国営の水族館になった。55 年前には主に木造の建物であったが、増築、増設、改築、鉄筋化、改修を繰り返し、現在に至っている。ここの特徴は熱帯、亜熱帯系の無脊椎動物を多種類、多数飼育し、実験も行っていることである。派手なショーは無く地味であるが、じっくり観察するには適しているであろう。かつて亀池であったところには今、電子顕微鏡もおかれている<sup>①</sup>。なお、イワシクジラの骨格標本もあり、そのペニスの乾燥標本には下記の歌まで添えられていたが、やがてビニールに覆われて見えなくなり、骨格標本は新宿舎前に置かれて保存され、さらに現在は京都の京大総合博物館に収められている。歌は“そのかみは 南氷洋の 雄鯨の 腰のあたりに おさまりて 種



たやさじと かむりふり つとめしいさを 人よ忘るな”。これは時岡隆先生の作といわれていた。替え歌は“ひからびて かくも巨大なものなれば すわ鎌倉のときは いかほど”。

## 第五期 1965～1974 年

主として若い所員、長期滞在の独身者、院生のための二階建て鉄筋コンクリートの宿舎、静修寮<sup>(2)</sup>（1965 年建造）も建てられたが、一寸手狭で、2 階は夏大変暑く、1 階は湿気がひどいようである。木立の中に有り、シロアリの害が問題であろう。また海辺に大変近いので、夏の海浜のにぎわいが大変やかましいようである。なお、楽学荘と静修寮の 2 軒の建物は京都理化学研究協会<sup>(3)</sup>（旧臨海実験所振興会を引き継いだもの）に依るものであり、ここにも泊まったことが数回ある。

現在の番所山には南方記念館に行く途中にさまざまな木々が生え茂っている。かつては番所山臨海パーク（1933～1973 年、前述）があった。戦争中には閉鎖し、戦後再開され、1960 年頃さらに手を入れて、山へ動く道路を経て爬虫類館（蛇類、ゾウガメなど）、小動物園（アシカ、鳥類その他小動物を飼育）を見せていた。このアシカは海に近い池からよく脱走して、ときには四国で発見されたこともあったそうである。後に山の上に様々な化石の博物館兼空中展望食堂が建ち、その上に南の海の国々のチキの神を模した像も付けられた。この像の崇りともいわれ、あまり流行らなかつたらしく、やがて台風で大被害を被って廃業した。その他様々計画されたようであるが中途半端に終わって全部が壊されて現在は荒涼としている<sup>(4)</sup>。ただ以前に海上保安庁の無人燈台が建設されている。また南方熊楠記念館（1965 年開館）は、昭和天皇が尊敬されておられた民俗、植物学者南方熊楠氏の業績を称えたものであり、多くの参考資料、遺品などが展示されてい

る。天皇が彼を偲ばれた御製碑も<sup>かたわ</sup>傍らに建っている。また、1962 年 5 月昭和天皇、皇后が行幸、啓された。さらに、1973 年には皇太子殿下（今の天皇）も来られた。周辺は高台なので見晴らしがよく、田辺湾全体、白浜の街を含め大海原がよく眺められ、天気がいと四国も見られる素晴らしい景色のところである。

また、職員宿舎は三十数年前に 8 軒、木造、鉄筋コンクリートで順次新築されたが、狭く湿気も多くあまり快適でないところもある様である。古い前の博物館の建物は、江津良にあった行幸記念博物館が戦争中の 1944 年に移設されたものであるが、私が初めて入ったときは相当痛んでいて、2 階へ上がるとぐらぐらして怖かったぐらいである。1 階にはスキューバ潜水用の高圧コンプレッサー室や研究室があり、研究室は水族館担当教員や院生の研究室としても使用されていた。しかし夏、外来の研究者の実験室が足りないときには 1 階で実験をしたこともあったが、使い勝手が悪く不便なところであった。新研究棟が整備されるとともにここは壊されて、現在は新しい宿泊棟になっている。2 階にあった標本類は危険なので 1983 年以後水族館の 3 階に移し、現在そこで整理が進められている。ラブカ、オオウナギ、リュウグウノツカイなどはこの貴重な標本である<sup>(5)</sup>。特別研究室は、多くの研究者により、私も含めて研究室として使われて来て今に至っている。手頃な部屋もあり火災に<sup>★</sup>因って焼けた部分など一部改造もされてきたが、歴史的な用具類の倉庫としても使われている。が、全体としてはやや荒れ果てている。殊に最近はいライグマの被害が著しい。天皇行幸記念の保存用の建物でもあり、研究室等の不足も補っている。この前には藤棚があったが台風で壊れ、今、藤は野生化している。

京大体育会のサマーハウス<sup>(6)</sup>は臨海実験所の中なので、夏期、宿舎が混んだときには分宿することもあった。ここは奥の方にあるので利用者には判りに

くく、臨海実験所内をうろついて判らず、よく尋ねられたものであった。山本虎夫先生夫妻が永く管理人であって、臨海実験所を訪れた研究者の多くはここに寄り、お酒を飲みながら研究の話をして居られたものであった。先生は学術雑誌“南紀生物”の創始者であり、海の生物についてよく御存知で、多くの研究者、学生は色々と教えていただいた。しかしお酒を飲み過ぎると一寸困ることが有り、それこそトラになられた。亡くなる2年程前、大阪淀川<sup>せとうち</sup>の傍の娘さん夫婦のところへ行かれたが、海の傍から離れるのを大変嫌がられたそうであった。先生に良く協調されておられ、自然保護にも熱心であられた奥さまもそれから1年あまりで後を追われたとのことであった。サマーハウスには夏休みなどは京大の学生その他がよく宿泊していた。建物は古い臨海実験所の寄宿舍に似ていたが、老朽化し、2008年建替えられた。木造であるが、京大の演習林の木材を使った高床式の近代的な設備も備えた面白い建物である。

図書資料保管庫は1965年完成され、この工事の前に遺蹟<sup>いせき</sup>が発見され以後各所で発掘調査が続いた。書庫は当初から収容量を増やすため、本来の1階建てを無理に2階構造にしている。すなわち天井が低く、特に2階部分は普通に歩くことが困難<sup>はり</sup>で、梁の部分は頭を打たないように注意をすることが必須である。そこにはプラスチックのスポンジが付けてあるが、うっかりして頭を打ち、後ろに倒れたこともある。しかし、図書の冊数は、海の生物に関する限り日本一であろう。整理もよくなされていて使いやすい。電子化に因って雑誌は減ったが、現在はもちろん今後の図書の増加<sup>ぞうか</sup>に対してはさらに大きな建物が必要なのはいうまでもない。是非実現して欲しいものである。

1967年臨海実習に來た女子学生の臨海実習学生ノートの記事に依ると、宿舎のおじさん曰く、“女の方が動物学なんかやって何になるんでしょう。医

学部へ行くんならまだ割合に多いでしょうがねえ。どうも合点がゆきませんが、ほんとうにまあ、よっぽど物好きでないとねえ、とにかく孤軍奮闘でがんばってください”と。……物好きでない。見ていて下さい。……女子学生談。この男性の考え方、当時は一般的かも、しかし現在では全く通用しない。セクハラもいいところである。なお、旧宿舎では、一室が女性用であったが、男性の目もあり、夏は閉め切らなければならなくて、大変苦しかったそうである。

1968年7月、一学生が臨海実習中にぬぐだし遊泳<sup>えいりやう</sup>していて、モーターボートに接触しスクリューで重傷を負い、輸血を必要とした大事故があり、遺憾なことであった。

島実験地(26,529平方メートル)は1968年国費で買い上げられた。臨海実験所当初より磯採集の場として最高のところであった。ここが神戸の大和観光により白浜ハワイアイランドとしての観光施設の建設計画が発表され、観光施設として開発されたので、実験所員特に時岡先生を中心に、地域の自然保護関係の人々、全国の大学関係者共々反対の大運動をした結果であった。その間に町の一部から強い反対も有り、様々な中傷、妨害も有ったそうである。それは今でも残っているらしいが、永い将来を考えるとこの試験地の存在は極めて重要であり、その判り易い意義の公開も必要と思われる。これらの詳しい経緯は大垣俊一氏の主催した“Argonauta”関西海洋生物談話会、連絡誌3:30-37(2001)に詳しい。その後10年近い年月をへているが、更なる検討、有効利用が必要であろう。ここに買い上げ3年後に実験所分室がブロック造り平屋建てでつくられた。島島での磯観察にはここで講義が行われ、休息、昼食、標本整理などが行われていて、かつては宿泊も可能であった。しかし、地域の人(入会権有り)、観光客、特に夏の水泳客がよく入島しているが、実験所から遠いので管理を

よく行うのが難しいのである。なお、この皇岛周辺の自然保護の為、時岡先生は100年間（一世紀）調査を提唱されたが、その一環とし今でも動物分布調査が行われている。私のウニ卵を用いた海水汚染の生物検定もその一つである。周辺での養殖で、防汚剤（TBTO）使用の影響の可能性が心配である。現在はこの類の使用が禁止されていて影響は殆どなくなってきた。

臨海実習学生ノートは1972年7月で終わりになっていて復活が望まれる。この頃自主実習としてテーマを決め、2,3人のグループで行われることがあった。大学紛争の影響であろうか。臨海実習全体のまとめとして、学生のまとめた問題点を挙げると、ある種の“団体生活”である。実習の“意義”は？ 正味1週間でも長いので“ダレ”を起こす。ほとんど“スケッチ”のみでは？ 等である。また、感想としては、海洋観測は良く期待されるが、海が荒れるとグロッキーになりやすい。実習は楽しいより苦しいことが多い。腹が減る、食事が唯一の楽しみである（食事についての記事が特に多い）。等々。

1973年7月、ハリサンショウニ、オカメブンプク、ヒラタブンプクの大発生があった。環境汚染変化の可能性が考えられる。日本海などではバフンウニでもこの現象が見られた。

## 第六期 1975～1984年及び現在

1977年3月臨海実験所の門からの通路は簡単に舗装された。その際、隅から昔の人の遺体（人骨）が発見された。そのとき、発掘にあたり調査をしておられた池田次郎先生が深い堀穴の底の骨の横で平気で昼食をされたのには一寸驚いた。遺跡調査は1981年にも行われ、製塩土器（土師器）などが出てきた。その複製品を水族館の前の池の傍に展示されていたが、ときとともに壊れていった。悪戯で石を投げたのか自然にであったのかはよくわからな

い。この池には食用ガエルがいてよく大きな声で鳴いていたが、今は干上がっている<sup>(7)</sup>。

実験所内では、かつて松食い虫により松枯れ（1978年頃）が起こり、殺虫剤が撒かれたこともあったが、他の多くの生物に対する悪影響が問題になり、中止された。やがて松はほとんど枯れてしまった（松の紅葉）ので伐採された。しかし、その頃の事務掛長は演習林の事務室に居られたこともあってか、松、椿、梅、桜などの植林をされた。若木が大きく育ってきて再び美しい松林となったが、最近はまだ松枯れが起ってきていて相当に枯れてきている。しかし、他の諸木の成長は良好で、防風林としての役目は果たしている。

1989年7月から1ヶ月余、University of California at Santa CruzのProfessor John S. Pearseが奥さん Vicki (Placozoaの専門家)と子息 Devon を連れてガンガゼの生殖周期性について、私と共同研究をする為に来られた。Devonは勉強を奥さんに見て貰いながら、暇なとき手持ち無沙汰でボールを研究室の壁にゴンゴン投げ当てていたが、円月島の岩山に昇りたがったのには困った。また蛇が好きで所内のシマヘビを手巻き付けていた。その後にアメリカの大学で生物学を専攻し、蛇の研究もしているとのことである。

実験所と街への海沿いの道路で、途中で山並みが低くなっているところ（馬目谷）があり、磯もここは陸へ入り込んでいる。夏、特に夜はここを通るとヒヤッとした風が吹いてくることが多い。何でもこの辺は地元では幽霊谷ともいわれていて、三段壁で飛び込んだ人の遺体が海流に乗って流れ着くことがあったといわれている。これを知っていると通っていても何となく気持ちが悪い思いをすることがある。なお、この道路は瀬戸漁協の辺りから実験所までは台風などで海が荒れ、波が道路に激しく打ち上ると通行禁止になることが多い。さらに荒れて江

津良まで通れなくなることもあった。10 年程前には、江津良付近で堤防がくずれ、修理が行われたのであった。こうなると実験所などは陸の孤島になってしまう。数年前、かつての山越えの道を臨海の近所の人による復活も考えられたが人手も少なく実現困難であり、何とかして欲しいものである。

1996 年 9 月の台風は予想を裏切って白浜を直撃、実験所にも大被害を与えた。赴任直後の白山所長の部屋はガラスが破られて吹き抜けにされ、また寄宿舎の窓ガラスも被害を受け、植木類も荒らされた。なおはるか以前から夏、白良浜で 7 月 30 日と 8 月 10 日に盛大な花火大会が行われてきている。前者は JTB、後者は白浜町主催であり、実験所からでも多少見えない部分もあるが、結構楽しく鑑賞できる。

2009 年 1 月、私は古い学生宿舎（静修寮）の一室を借りた。二階は夏暑いし、冬は下が寒いしだったが、下の方にして当所を訪れた時に簡単な生活をするようになった。しかし冬の寒さには参って一年で退散した。一方、温暖化は進み、見たことのない南方系のサツマゴキブリという丸っこく、黒褐色の平べったい虫が野外に増え、海ではムラサキイガイが減ってミドリイガイが増加する等が起きている。また、温暖化と関係はないが、最近、日本各地でその被害が問題化しているアライグマの害は、実験所でも特に特別研究室の半分くらいが占拠されたらしく、その糞害は、恐ろしいもので憤慨に堪えない。また、2012 年 8 月末、南浜に暴力団の男？が車で来て、音楽を大きく流していた後、刃物を持っているらしいとなって、多数の警官が探し回り、実験所の関係者全てに対し危険であるから建物の中に留まるようにという事になり、ヘリコプターも飛び回って大騒ぎになった。徐々に警戒も緩くなり、翌朝早く番所山近くの海辺で彼の身柄が確保され事無きを得た。

## 追記

### コシダカウニを巡って

コシダカウニの発生は、1936 年、小野田勝造氏（1929 年卒）によって、変態迄研究された。私は 1955 年以来 1970 年迄このウニを用いた細胞分裂、発生に関する研究を行った。当時は岸で小型だが多数、容易に採集出来た。卵が比較的大きく、透明で、受精膜が大きく（但し沖のきれいな海水で）、受精発生の観察には最適のものである。生殖周期には半月周期性があるらしく、生殖時期の大潮前後には卵、精子が成熟していることが多い。しかし、受精の際に、精子の数に注意しないと多精になりやすい。また、環境条件に<sup>はなは</sup>甚だ敏感であり、発生に異常を起こし易く扱いに注意を要する。私の生物検定には、その結果にぶれがあって使うことは出来ない。ウニ界のお姫様で、寿命は 2,3 年と思われ、美人薄命そのものである。

1960 年前後このウニが沢山採れた頃、他所の研究者も数年間使いに來られた。慶応大遠藤善之氏（1947 年卒）の電頭による受精に関する研究（1958）、都立大岡崎嘉代女史（奈良女高師卒）による囊胚形成に関する有名な研究等である。その後佐藤英美氏（1951 年卒）も使いに來られたが、後、名大菅島実験所の所長として、ウニを中心とした細胞生理学研究の優れた設備を整えられた。

現在はこのウニの個体数も極めて減っているの  
で、実習には大切にして、デモンストレーションのみにしてはと思われる。

### 駒井文庫について

初代所長駒井卓先生の蔵書、文献の内、海洋生物学関係などが書庫に収められているが、さらに未整理な分が追加整理、製本された。これらは大切なものとして今後とも利用されるであろう。なお、先生のダーウィン関係書は京大動植書庫に、両生類関係

は広島大に、<sup>しょうじょうばえ</sup>猩々蠅遺伝学関係は遺伝研に収められている。その他の生物学全般、人類遺伝学関係は京都の駒井邸に保存されている。これらは駒井先生の系統分類学を始めとして視野の広さを示すものであろう。

動物系統分類学の日本に於ける中心の一つとして、瀬戸臨海実験所は北大の当該部門と共に大切な拠点であろう。分子遺伝学、バイオの時代になっても、その基礎として、必須の分野である。

実験所において教育、研究に関連して、既に亡くなられた方々にお世話になったことが沢山ある。その思い出などを簡単に記しておきたい。

**内海富士夫先生 (1910～1979)** 研究一本槍の、全ての人に非常に優しい方であった。分類に広い知識を持っておられた。

**時岡隆先生 (1913～2001)** 常に正論を言われ、非常に怖い先生であるといわれていたが、研究熱心な方であった。また、白浜の自然保護に関しては、多方面に大きな貢献をされた。その内の最大のものは、島島の実験所の付属化による保全であった。なお、亡くなられる前には、クシクラゲの分類に関して持論を持っておられて、物凄く執念を示された。私は非常にお世話になった。

**波部忠重先生 (1916～2001)** 非常に気さくな方で、半分友達のように話して下さるので、ときには仲間とともにからかったりしたことも有る。あるとき海底観光船の波止場近くで海にはまったと言って来られたので、乙姫プールの海女の水泳中の姿に大口を開けて見とれたのでしょうかと言ったら苦笑され慌てて否定されておられた。これが流言飛語となってしまった。またある臨海実習で、学生の一人が薄い水着のポケットに、生きたタガヤサシミナシを入れていたのを発見し、顔色を変え？あわてて「早くそれを捨てろ」と怒鳴ってことなきを得た。悪くす

ると死に至るところであった。晩年に実験所に来られたときに、夜、水族館の地階に転落され、腰に重傷を負われたが、無事治られた。昔の水族館とは全く変わっていたからでもあろう。

**山路勇先生 (1916～2003)<sup>⑧</sup>** 非常に気楽に話せる方で、ずいぶん色々なことを相談した覚えが有る。写真撮影がお得意で、とくにプランクトンの写真を基に図鑑を作られたこともあった。

**西村三郎先生 (1930～2001)** 非常に広い知識を持っておられた。京大教養部に移られてからは執筆に集中されたのは惜しいと思う反面、その著述は素晴しかったが、早くなくなられたのは残念であった。

**原田英司先生 (1933～2009)** 所長として、実験所施設の整備や財政難の中、地域環境の保全にずいぶん苦勞された。非常にマメな方で、色々な資料が良く整理されているのには感服した。この文を書くにあたりずいぶん参考にさせていただいた。

以上の他、寄宿舎の食事時などには、方々の大学の教員、研究者に出会い、色々な語らいで得るところが極めて多かったと思われる。

私が最初に実験所に来させて頂いてから 60 年を経たが、ここで未だに研究、調査が許されていることには大変感謝している。歴代の所長始め、所員、関係者に厚く御礼申し上げる。なお、創設以後の略史の時期は“瀬戸臨海実験所五十年史 1922～1972”京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所 昭和 47 年 9 月に倣い、引き継いだ。また、臨海実習学生ノート、その他の諸文書などから転記したものもあるが、一々挙げられないのでその使用を御許し願いたい。水族館、実習船に関してはよく判らないので記さなかった。他のより適した方が記されるであろう。

なお、ごく最近のことについては、記憶に新しいので記さなかった。これらについては、後年続いて記される方がなされるであろう。